神奈川県立博物館発掘調査報告書

第 11 号

上 台 遺 跡

A REPORT ON THE ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
BY KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

No.11

KAMIDAI

神 奈 川 県 立 博 物 館
KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM
Nakaku Yokohama Japan
1 9 7 9

上台遺跡発掘調査報告書

目　　次

1. 上台遺跡（配水場東）の発掘調査について …… 1
2. 遺跡の位置 …… 1
3. 調査の概要 …… 2
4. Ⅰ区の遺構・遺物 …… 4
5. Ⅱ区の遺構・遺物 …… 7
6. 結　　び …… 9

挿図・図版目次

第1図　上台遺跡付近地形図 …… 11
第2図　発掘区平面図 …… 13
第3図　1号住居址実測図 …… 15
第4図　Ⅰ区出土土器拓本 …… 17
第5図　Ⅰ区出土土器拓本・石器実測図 …… 19
第6図　炉穴実測図 …… 21
第7図　Ⅱ区Aトレンチ西壁実測図 …… 21
第8図　2号住居址実測図 …… 23

図版1　(1)上台遺跡(配水場東地点)遠景　(2)1号住居址
図版2　(1)1号住居址内貝塚堆積状態　(2)1号住居址内貝塚貝層断面
図版3　Ⅰ区出土土器
図版4　Ⅰ区出土土器
図版5　(1)軽石製品平面　(2)軽石製品側面
図版6　(1)2号住居址(南側より)　(2)2号住居址(東側より)

調査主催者……神奈川県立博物館長　高橋繁蔵（1～2次）
〃　北林一光（3次）

発掘担当者……神奈川県立博物館専門学芸員
神澤勇一

調査期日……（1次）昭和51年3月1日～10日
（2次）昭和52年3月16日～29日
（3次）昭和53年3月21日～30日

報告書執筆……神澤勇一

1. 上台遺跡（配水場東）の発掘調査について

本調査は昭和50年3月、横浜市梶山遺跡（鶴見区梶山所在）の第4次発掘調査を実施中、標高を求めるため鶴見区上末吉の台地上に存在する三角点におもむいたさい、三角点に近い開墾中の畑の断面に貝層を認めたのが発端である。

この貝層は堆積状態と貝層中の土器破片から縄文時代前期に属する住居址内貝塚と考えられるものであったが、開墾の進行や耕作により滅失の恐れが多く、早急に調査する必要を感じた。幸い、耕作者金子直司、地主横山義雄両氏に事情をお話したところ、開墾の一時中止と発掘調査について快諾を賜わったので、昭和51年3月に第一次調査を実施したのである。

第一次調査においては神奈川県立博物館発掘調査報告書第10号に発表した予報のとおり、貝塚が黒浜期の住居址内貝塚であることと、発掘区の一部から少数の夏島式土器の出土することが確かめられた。そして、夏島式土器出土遺跡は神奈川県下においても未だ少く、特に鶴見付近での最初の例であるため引続き調査を行うこととし、昭和52年3月に第二次、昭和53年3月に第三次調査を実施した。

後2回の調査は夏島期の遺構遺物の検出に重点を置いたが、残念ながら僅かに資料の増加をみたに止まり十分な成果が得られたとは言い難い。ただ、第二次調査では発掘区域内に存在した縄文時代の炉穴1、第三次調査では久ヶ原期の竪穴住居址1を発掘することができた。

このほど資料整理が一応終了したので、ここに調査結果を一括して報告する。

本遺跡の調査については、金子直司氏、横山義雄氏、明治大学・国学院大学・立正大学・青山学院大学・立教大学の学生ならびに卒業生諸氏から多大なご協力を賜わった。稿を起すに当たり、記るして厚く感謝の意を表する次第である。

2. 遺 跡 の 位 置

上台遺跡（配水地東地点）は神奈川県鶴見区上末吉1丁目921番地にあり、上台と称される標高42mの台地上に位置する(図版1－1、第1図)。

多摩丘陵に源を発する鶴見川は横浜市北部をほぼ東西に貫流し、鶴見区付近で一たん北上したのち南へ向きを変え、蛇行しつつ東京湾へ注いでいるが、河口付近の右岸には大小さまざまの谷を擁し、かなり複雑な地形をもった海蝕台地が連なる。上台は、その一部をなすもので南北に細長く延び、東側は鶴見川に直面している。

台地上面は平坦で以前はほとんどが畑地であり、各所に土器破片の散布が認められ、縄文時代以後古墳時代に至る間の遺物・遺構がしばしば発見されるところから、上台遺跡と呼ばれてきた。しかし、実際には数地点の存在が十分認められるので、この遺跡名は上台上に点在する遺跡群を総称するものと理解するのが妥当であろう。今回調査した遺跡もそうした遺跡の一つ

と考えられ、したがって上台遺跡という名称の使用には難があるが、調査地点付近に特別な名称がないため、とりあえず上台遺跡（配水場東地点）と呼ぶことにしたい。

現在、上台上面はかつての面影を失い、中央部は大半が川崎市水道局末吉配水場となり、周辺は宅地化が著しく進み、畑地はごく一部に残っているにすぎない状態である。

遺跡はいま挙げた末吉配水場の東側に存在し、ちょうど配水場の東壁を基線にしたような形で、基部の幅約100ｍ、長さ約80ｍの半島状に突出した部分にある。先端は籔、その他は未だ畑地のままで、地表面に縄文式土器、弥生式土器、土師式土器の破片が比較的濃密に散布しており、遺跡の範囲はこの半島状突出部から配水場の一角に及んでいたものと考えられる。

発掘地点は、半島状突出部上面を北西から東南へ斜めに走る農道の東側、先端に近い中央部から北側縁辺に及ぶ個所である。なお、農道より東側の、発掘地点を含む畑地は、地表面が一部削平され道との間が高さ１～1.5ｍの土手をなし、当初の地形を幾分失なっている。

3. 調査の概要

本調査は、当初住居址内貝塚の存在が予想される部分についてのみ行う予定であったが、発掘の過程で夏島式土器の出土をみたため、それに関する遺構・遺物を求める目的をもって第二次・第三次の発掘を行なった。以下の記述においては、便宜上、第一次調査の発掘区をＩ区、第二次・第三次調査の発掘区をII区と呼ぶ(第２図)。

Ｉ区は貝層が露出した個所を中心に10×6.5ｍの規模で設定した。

II区は耕作、開墾、調査日程等の関係でトレンチ法を採ることとし、Ｉ区東側へ南北方向にＡトレンチ（２×６ｍ）とＢトレンチ（２×７ｍ）を、またＩ区南側へ東西方向にＣトレンチ（２×10ｍ）、Ｄトレンチ（７×３ｍ）およびＥトレンチ（5.5×２ｍ）を設定し、一部拡張区を設けた。

層序についてはＩ区、II区とも大差なく、基本的には表土（耕作土）＝第１層、暗褐色土層＝第２層、暗褐色粘質土層＝第３層、黄褐色粘質土層＝第４層、関東ローム層＝第５層の順に堆積しているが、地点により存在しない層もあり、厚さも異なる。

Ｉ区の状態は、付近一帯が畑地化されたさい削平され、表土の一部を失なっていて、現状で表土20～25cm、暗褐色土層20～25cm、暗褐色粘質土層５～10cm、黄褐色粘質土層10～20cm、以下関東ローム層となる。そのうち暗褐色粘質土層と黄褐色粘質土層は１号住居址付近では認められず、Ｉ区東半部に薄く堆積していた。II区の状態は、Ｃトレンチの一部が削平された結果表土の一部を失なっている。各層の堆積をみると、基盤をなす関東ローム層の傾斜に従い西方から東北方へと厚さを増し、II区Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅ各トレンチ、すなわち調査区東半においては表土50～85cm、暗褐色土層25～35cm、暗褐色粘質土層20～35cm、黄褐色粘質土層10～15cmとなっている。II区Ｃトレンチ西端とＢトレンチ北端の関東ローム層の比高は、約1.5ｍを計った。

I　区

I区は、周囲の状況からみて貝層露出個所付近に住居址壁の存在が予想されたので、畑地から開墾予定地にかけて設定した。

その結果、I区西半部において暗褐色土層に直接する関東ローム層上端に落込みが認められ、覆土中にブロック状の小貝塚を伴う黒浜期の住居址（1号住居址）が単独で存在した。1号住居址の直上と覆土からは遺物の出土が特に多く、土器は、数片をのぞいて黒浜式土器である。I区、II区を通じて石器の出土は僅か5個にすぎないが、それらはすべてこの部分から出土した。なお、住居址覆土中に夏島式土器の小破片が1片検出された。

I区東半部では遺構の存在は全く認められず土器破片の出土も少い。しかし、東端付近において黄褐色粘質土層中に、夏島式土器の小破片が11片出土している。表土、暗褐色粘質土層からも数片出土したが、深耕のさいの攪乱によるものであろう。

I区における遺構は黒浜期の1号住居址のみであり、遺物の散布も少なかったが、I区北端より5～10m離れた畑の、天地返しされた場所に2個所、やや多量の黒浜式土器と少量の貝殻が散布した個所があり、同期の住居址がかつて存在した可能性が多い。調査結果と考え合わせ、おそらく同期の集落の中心はI区の北西側にあると考えてよいであろう。

II　区

夏島式土器と同式に伴う遺構の追求を主目的とし、5個のトレンチを設定した。しかし、Aトレンチの黄褐色粘質土層中に人為的破砕の痕跡を残す少数の礫とともに、数片が出土したにすぎなかった。I区出土例も含め、器面は保存状態が良い。したがって遠方から転落したものとは考えにくく、撚糸文土器を出土する遺跡の一般的あり方に照らせば、付近に遺物の包含の多い地点が存在する可能性がつよいが、崖際に近く危険なため、トレンチの増設を打切った。

II区においては、目的を達成できなかったが、発掘の過程で、CトレンチからDトレンチの一部にかけ、縄文時代早期（後半？）と想定される炉穴1と、弥生時代後期（久ヶ原期または弥生町期）に属する2遺構が存在した。

遺物は土器破片のみで、各トレンチの表土、暗褐色土層、暗褐色粘質土層で出土した。夏島式土器が出土したAトレンチを除き、黄褐色粘質土層中に土器の包含は認められなかった。型式別にみると黒浜式土器がほとんどを占め、Eトレンチでは少量の久ヶ原式土器または弥生町式土器が混在する。その他では、CトレンチとDトレンチで、茅山式土器、関山式土器の小破片が数片出土したにすぎない。

4.　Ⅰ区の遺構・遺物

（1）1号住居址（図版1－2、第3図）

Ⅰ区西半に存在した平面3.9×4.1mの不整方形を呈する小型の竪穴住居址で、主軸方向がN－40°－Eにある。

住居址の落込みは関東ローム層上面から明瞭に認められた。床面の状態は不良で全面にわたり凹凸が著しく、部分的に軟弱な個所があった。周溝がなく、壁面付近では床面が多少高くなる。床面には大小18個のピットが存在した。このうち一応柱穴と思われるのはＰ１～Ｐ７であるが、不規則的な配置を示し、柱穴相互の関係を把握し難い。壁面に沿い不揃に存在する11個のピットは、いずれも深さ15～20cmにすぎないので、壁面補強のための施設に関係するとみなし得よう。

住居址北隅の外にある2個のピットが本住居址に伴うものか否かは明らかではない。

炉址は北東壁面近くにあり、平面35×40cm、灰と焼土の厚さは中央で10cmをはかる。Ｐ２とＰ３の付近にも部分的に薄い焼土があったが、それらは床面に明瞭な焼痕を欠き、灰混りの焼土が1～2cmの厚さで散乱したものと考えられる。

第3図Ａ－Ｂ断面実測図に示したとおり、覆土は下から暗褐色粘質土、混土貝層、黒色土の3層に区分できる。暗褐色粘質土はⅠ区東半その他にみられる暗褐色粘質土層に近い。床面に皿状に堆積し、その上に有機物を多量に含む黒色土が、3個のブロック状混土貝層から成る小貝塚を挿んで堆積する。

この小貝塚は第3図平面実測図にみられる如く、住居址の大半を覆う。ブロック状混土貝層は、いずれも中心線がほぼ東西方向にあり、西側末端が尾をひくように薄く上方に延びている。この状態は、貝殻の投棄が西側から行われたことを示すものと考えられる。ブロック状混土貝層相互の間における先後関係は明らかでないが、貝層の堆積状態と出土土器に差がなく、下端のレベルもほとんど同じなので、ごく短期間に相次いで形成されたものと認めてよかろう。

貝塚を構成する貝殻の量は約2㎥で、ハマグリ、チョウセンハマグリ、カガミガイ、シオフキ、アサリ、オキシジミ、マガキ、ツメタガイ、アカニシ、ハイガイ、サルボウの11種が認められた。二枚貝が圧倒的に多く、そのうちハマグリとチョウセンハマグリが90％強を占め、主体をなす。しかし、それらは中型以下の個体に限られ、2×3cm大の個体さえ混っている。他の種類も、同様に未発育の個体が多い。

魚骨と獣骨については特に注意を払ったが、検出されなかった。

（2）1号住居址出土の遺物

覆土（黒色土、混土貝層、暗褐色粘質土）から土器破片と石器3点、床面から土器破片2点

が出土した。

覆土における遺物の包含は混土貝層、黒色土に多く、暗褐色粘質土では壁付近の下半と住居址中央部の床面より10cm上までの間においては著るしく散慢であった。

なお、本住居址は関東ローム層上面から竪穴の落込みが認められたが、竪穴の上端は当然、本来それよりも上にあったと考えなければならない。

事実、Ⅰ区でもこの付近では暗褐色粘質土層（第3層）の堆積を欠くうえ、住居址直上の暗褐色土層（第2層）の下端、覆土上10～20cmの間はⅠ区の中で住址を外れた場所に比べ土器破片の包含が特に多く、覆土出土土器と同一個体に属する破片が目立ち、幾つかは接合できた。暗褐色土層中には竪穴落込の痕跡を確認できなかった。しかし攪乱による混入ということもあろうが、この場合少なくとも一部が覆土であったことは誤りないであろう。そこで暗褐色土層下端出土の遺物を一応、覆土出土遺物に準じて扱うことにしたい。

図版3～5、第4～5図に示した遺物（1～39・48～53）のうち、「暗褐色土層」と表記したものは、これに該当する。

土　器

土器はすべて破片で、出土量は45×35×15cm大の資料箱約6個分を充たす程度である。器形は深鉢形土器に限られ、口辺部が外傾し、そのまま胴部へスムーズに移行する形をとるもの、口辺部がやや外反し頸部で一たんくびれたのち胴部へ移行する形をとるものの二種類に大別できる。

口縁は平縁がほとんどで、波状口縁はごく少い（3・7・10）。底は平底と上底の二種類で、底面付近で外側に僅かに張り出す。なお、平底中に、底面に木葉圧痕の付いたものが1例存在するが、樹木の種類は明らかでない（37）。一般につくりが粗雑で胎土中に多量の繊維を含み、加えて焼成が不良であるため、脆く、器面の色調は暗褐色ないし黒褐色を呈する。なお15、18は雲母片が混入されており、また僅か1例であるが、2の口縁部破片には外面に丹彩が施こされている。

文様は縄文、あるいは縄文を地文に半裁竹管文その他を加えたものが90%を占める。節はきわめて粗く、条も整っていない。無節縄文、単節縄文、複節縄文、複々節縄文、無節羽状縄文、単節羽状縄文、異条斜縄文等が認められる。左撚、右撚のいずれもがあるが、左撚1段の縄を基本に撚り重ねたものの方が多い。このうち主体的存在は単節縄文で回転方向に、かなりバライテイをもつ。

無節羽状縄文、単節羽状縄文では撚りの異った縄を結束した原体によるものと、撚りの異なる原体を交互に回転したものとがある。胴部では帯状に配列されているが、口辺部には、原体の回転方向を変えることにより、重菱形文状に構成した例があり（4、26）、同様な構成を単節異条斜縄文、複節異条斜縄文で行なっている例もある（24、12）。

縄による文様には、ほかに左撚り1段の撚糸を棒巻きした原体を回転させて付けた網状文が

2例だけ知られる。

口縁から胴部なかばまでの器面には縄文の上に、半裁竹管による押引文（4、13、21）、平行線文（19）、コンパス文（30）、竹管による円文等がしばしばみられる。14、15は、口縁直下だけ縄文を磨消し、そこに半裁竹管や幅約1.5cmの櫛状施文具で鋸歯文を描いたものである。

そのほか、素面に半裁竹管による平行線文（19）、アナダラ属の貝殻腹縁を押捺した貝殻文（34）などの付いた破片もあるが、数は少ない。

床面、暗褐色粘質土、混土貝層、黒色土（および暗褐色土層下端）出土土器の特徴は以上のとおりであり、その間に差はなく、また他型式土器の混入は認められなかった。それらの示す特徴から、いずれも黒浜式土器に比定さるべきものである。したがって土器とその出土状態によれば、1号住居址の時期は黒浜期と考えられる。

石　器

石器の出土はきわめて少なく、覆土中から掻器1点（50）、礫器2点（49. 52）の出土をみたのみであった。

掻器（50）は暗褐色粘質土出土。黒耀石製で器体が三又状を呈し、突出部分の断面が不整円形に近く、凹部縁辺にこまかな損耗が認められる。掻器の機能を考えて誤りなかろう。

礫器のうち52は混土貝層出土。大型で扁平な礫の一端に片面から粗い剝離を加え、粗雑な刃を付けたもの。また側面の片側は敲打に使用したらしく、磨耗と小欠損が生じている。器面は両面ともほとんど自然面のままである。粗粒凝灰岩製。また49は片面が自然面のままの礫器の刃部破片で、片面から粗い剝離を加えて刃が付けられている。硬砂岩製。

以上3点のほかに、1号住居址直上の暗褐色土層から出土した軽石製品（53）がある。前述のとおり、1号住居址覆土と考えられる位置の出土品なので、ここで採り上げることにしたい。

この石器は一部を欠損しているが、平面10.0×12.7cmの扁円形で、片面は平滑で僅かに反りをもち、他面に平面5.3×7.2cmの扁円形を呈する摘み状の突出部が付いている。突出部の中程はくびれており、整形はかなり良い。不明にして本例に類する資料を知らないが、いわゆる浮子の一種ではなかろうか。

（3）1号住居址以外のI区出土遺物（図版5・第5図－40～48）

1号住居址覆土以外の遺物は、表土、暗褐色土層および黄褐色粘質土層出土の土器破片40片余と石器（敲石）1点、土製品（土錘）1点があるにすぎない。

土　器

表土と暗褐色土層の土器は、撚糸文系土器破片3片、貝殻条痕の付いた土器破片（茅山式土器？）1片、弥生式土器（型式不明）破片数片を除けば、すべて黒浜式土器に属するものであ

った。これらについては特記すべきことがなく、紙数の関係もあり、記述を省略したい。

Ⅰ区東半部から現われる黄褐色粘質土層からは、縦走する撚糸文または縄文の付いた土器破片のみが、単純に出土した。

断面形をみると口縁が僅かにふくらみ、以下、反りを持たずに胴部へ移行する器形をとることが知られる。条の間隔は密で、強く押捺されている。口縁上に撚糸文、縄文の施文は無い。胎土に繊維を含まず、焼成は比較的良好で、色調は暗褐色ないし黄褐色を呈する。以上の点は、表土および暗褐色土層中に存在した撚糸文土器も同様であり、本来黄褐色粘質土中に包含されていたものが攪乱により浮き上がったと考えて誤りない。これら一群の土器は、その特徴からみて、夏島式土器に比定できる。なお、Ⅱ区Aトレンチ出土例を加えても、18例という少数ではあるが、縄文の付いた破片は3例、他はすべて撚糸文であり、夏島貝塚出土土器の場合と同じく、撚糸文が縄文より多いという傾向を伺わせる。

石　器

敲石で、1号住居址付近の暗褐色土層中から出土した（51）。平面が長方形に近い扁平な礫の両端を使用しており、その部分に著しい磨滅が認められる。片面には長軸に沿い2個の浅い凹みが相接して設けられており、或いは磨石の機能も幷せ持つものかも知れないが、明瞭な痕跡はない。結晶片岩製である。

土　製　品

土器破片を利用した土錘1点である（48）。約3分の1を欠失しているが、土器破片の周囲に研磨を加えて整形し、長軸の両端に紐掛けの凹みを設けたもの。土器破片は胎土に多量の繊維を含むことと、粗大な縄文の付いている点で、黒浜式土器と考えられる。

5.　Ⅱ区の遺構・遺物

（1）炉穴（第6図）

CトレンチとDトレンチにまたがって存在し、暗褐色粘質土層上面において落込みが認められた。

平面は不整円形で東西2.5m、南北2.7m。実測図に示したように深皿状を呈する。関東ローム層を約15cm掘りこんでいて、床面の深さは中央部で、暗褐色粘土質土層上面から60cmを計る。焼土は床面の南寄りに1個所存在した。焼土部分の床面は一段深く掘りこまれており、焼土はその凹所に平面45×60cmの範囲にレンズ状に堆積し、厚さは中心で約30cmであった。炉穴の覆土は暗褐色土であるが、下半部の焼土周辺では、焼土と灰が混入する。焼土の北側に当たる床

面には、深さ15～20cmの細長い凹所2個が、また壁の北東隅には柱穴状を呈する深いピット3個が掘り存在した。いずれも性格不明であるが、この炉穴に伴うものと考えられる。遺物は覆土上端から混入の状態で出土した黒浜式土器破片数片と、焼土に含まれていた土器破片1片以外、全く検出されなかった。焼土から出土した土器破片は、炉穴の時期を決定するものであるが、火熱のため器面が焼けただれ、脆い。そのため文様を明確に把握し難く、僅かに表面に当る側に細い隆線文と貝殻条痕の痕跡がかすかに認められるにすぎない。したがって型式の認定は困難であるが、貝殻条痕が付いているところからみて、おそらく縄文時代早期中葉～後半に属するものと考えられる。

（2）2号住居址（図版6－(1)・(2)、第8図）

住　居　址

II区東端のEトレンチに存在した弥生時代後期の竪穴住居址である。

平面3.9×3.4m、胴張り方形を呈する小型の住居址で、主軸はN－12°－Eにある。東側の壁の一部は耕作により破壊されている。この住居址は暗褐色粘質土層上面において、有機物を含む黒褐色土の落込みが認められた。床面は関東ローム層上端にかかっているが、全体に軟弱で張り床と思われるほど状態が不良であり、壁もきわめて弱く、南側では末端の識別が非常に困難であった。小型であるためか周溝はなく、また壁に沿った床面にも小ピット等の存在は認められなかった。

柱穴と考えられるピットは5個存在する。しかし、4本の主柱を対象的に配する一般的な配置に対し、この住居址の場合は不規則的である。もし通常の配置ならば北隅のピットはおそらく主柱穴の一つとみられるが、組みになるべき他の3個は明らかでない。

炉は北壁から主軸に沿って約1m離れた位置にある。平面がほぼ円形を呈し、直径約70cm。炉床は床面を5cm皿状にくぼめて設けられているが、焼土と灰の堆積は薄い。焼土が薄く、床面が軟弱で踏み固められていない点は、使用期間がかなり短かかったことを示すと考えられる。

遺　　物

覆土および床面から壺形土器と鉢形土器の破片が少数出土しただけであった。いずれも小破片であるため型式の判定が困難である。

ただ床面直上出土の壺形土器の破片中、複合口縁で口径が15cm以上に達すると考えられるものがあり、床面出土破片に胴が大きく張る器形を示し、弥生町式土器に多い節のこまかな羽状縄文と縄文を連続する山形沈線文で区別した文様の付いたものがある。したがって、本住居址の時期は久ヶ原期または弥生期の何れかに属すると考えてよかろう。なお、覆土上部から久ヶ原式の鉢形土器に特徴的な輪積装飾の口辺部破片が1片出土したが、2号住居址と直接の関係があるか否かは不明である。

（3）炉穴、2号住居址以外の遺物

II区においては遺物の出土が少なく、すべて土器破片でその総量は45×35×15cm大の資料箱3個を充たす程度にすぎない。

Aトレンチから出土した夏島式土器の破片は僅か3片とは言え、同式土器の遺物包含層が黄褐色粘質土層であることを確認させた点で重要であるが、既に4項で触れた。また、その他の土器については、3項に述べた以上に記述すべき点がなく、紙数の関係もあり省略したい。

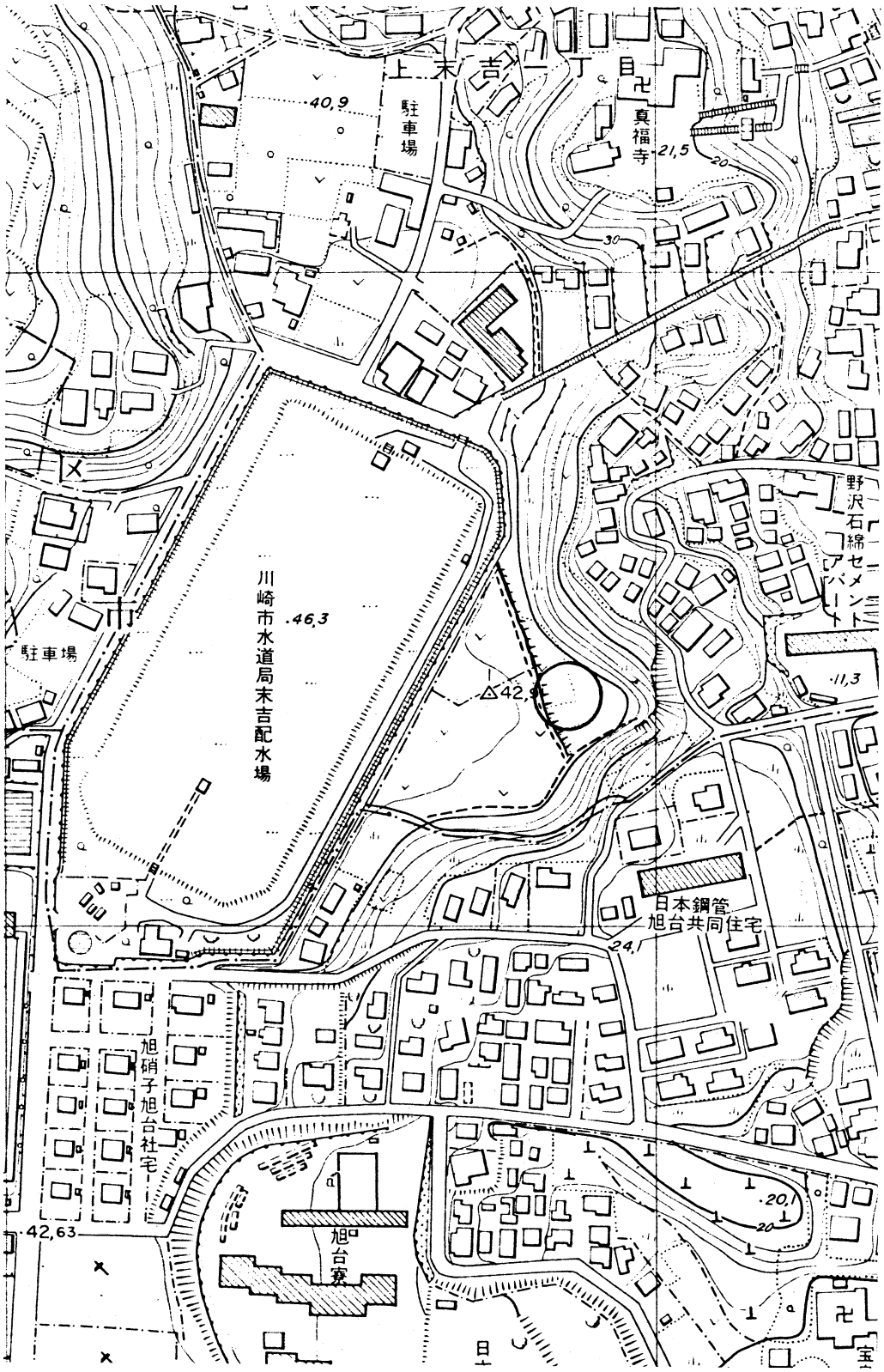
6. 結　　び

上台遺跡（配水場東地点）の第1～3次調査の概要は以上のとおりである。

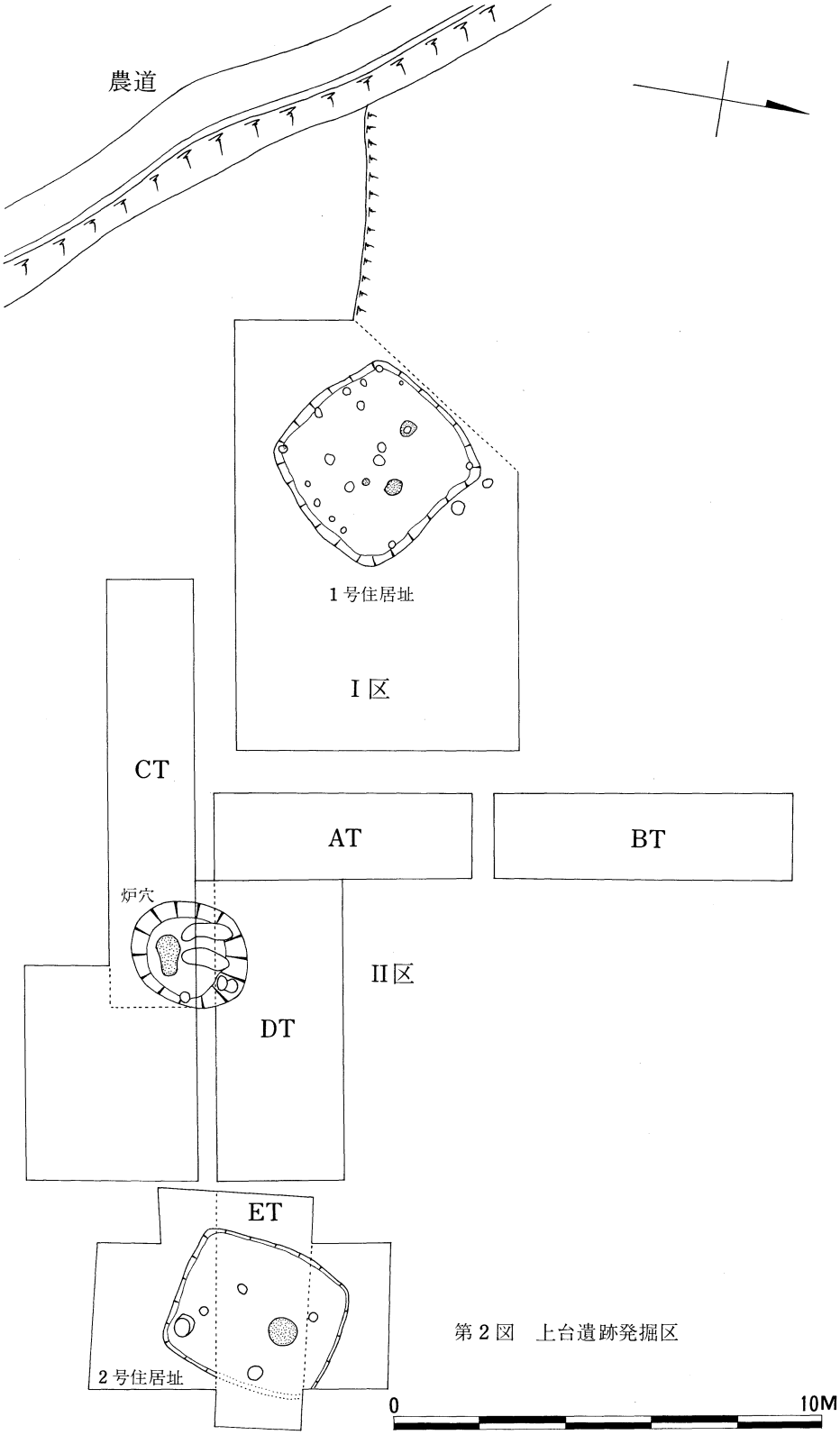
第1次調査においては、住居址内貝塚を伴う黒浜期の竪穴住居址（1号住居址）を調査し、記録と資料収集を果たすことができたほか、夏島式土器の存在が知られるという予想以上の結果が得られた。上台周辺では最初の出土例である。

夏島式土器の追求を主目的とした第2、第3次調査については遺物包含層を確認したのみで、所期の目的を達成できなかったが、縄文時代早期と考えられる炉穴と弥生時代後期の住居址1（2号住居址）を発掘し、新たな例を追加することができたのは幸いであった。そのうち、後者は半島状突出部の先端に近く、付近に同時期の住居址の存在を想定しにくい地点に位置し、遺構の状態も同期の一般的な形とは異なっている。この住居址については、特殊な使用目的があったのではないかと考えられる。

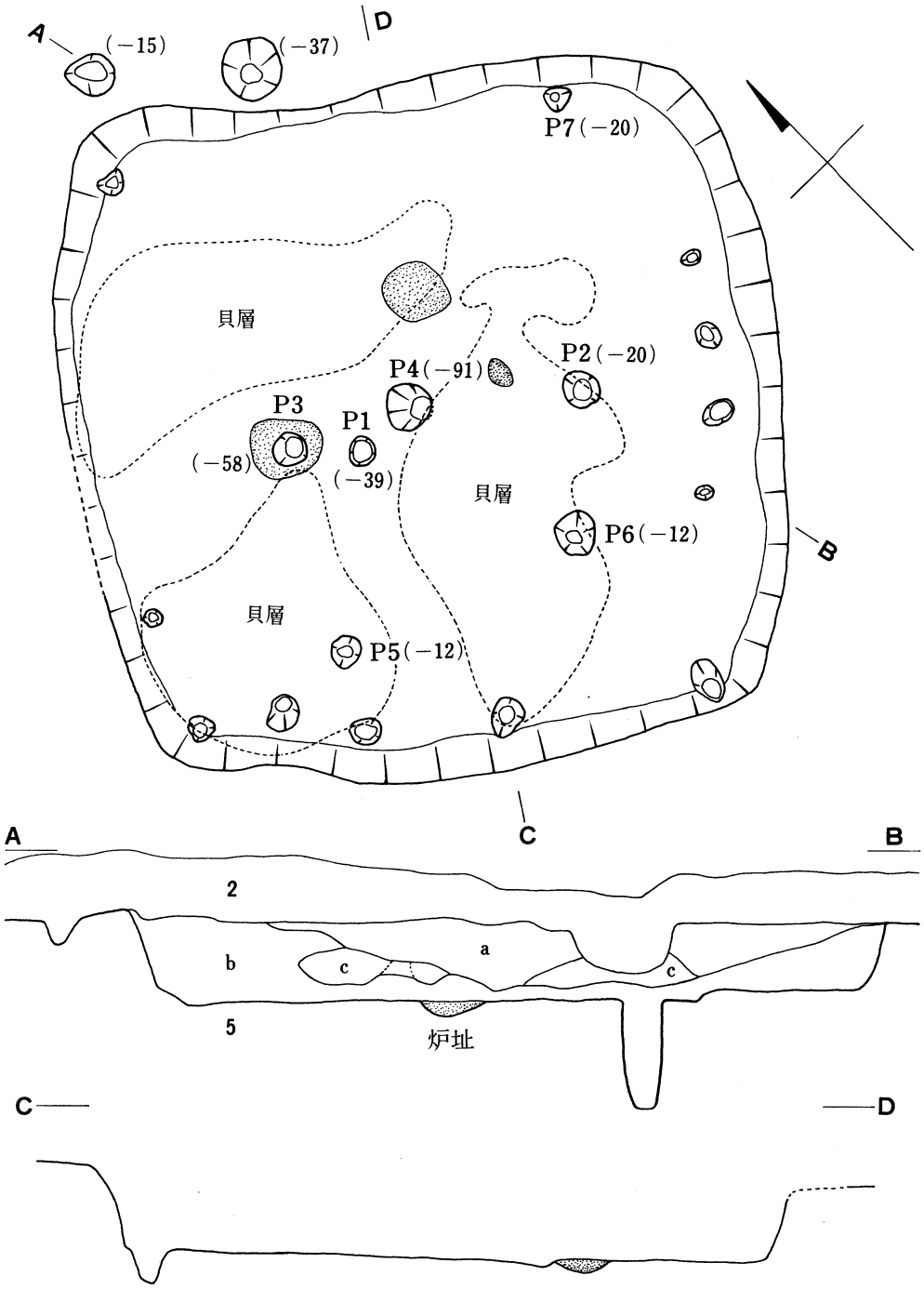
なお、本遺跡の第1次調査の概要を第10号末尾に載せたが、資料整理途上であったため、記述に一部不正確な点を生じた。また、以後の調査により、層位名称を変更したところがあるので、ご容赦をお願いする次第である。



第１図　上台遺跡付近地形図　(1：2500)



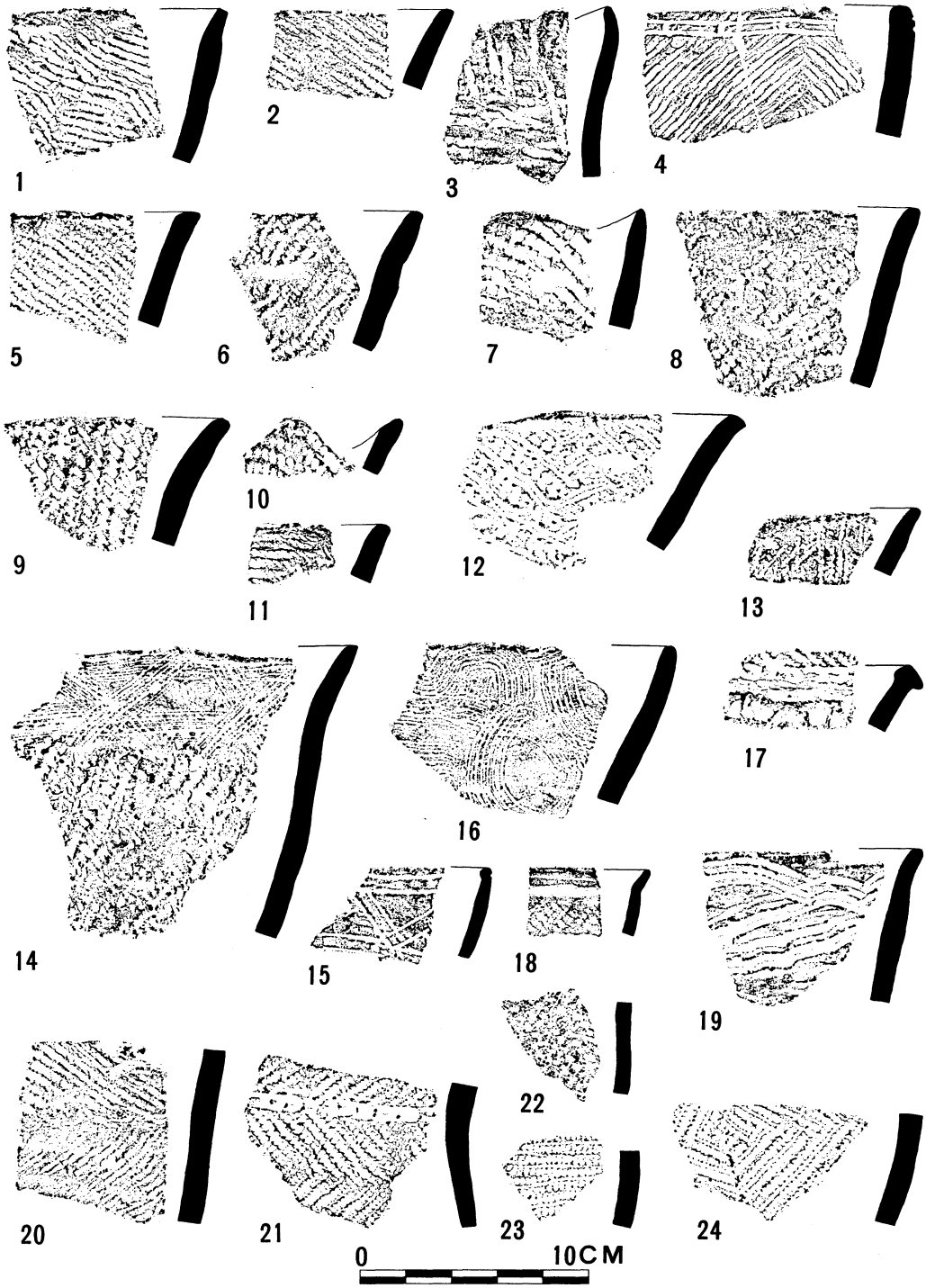
第2図　上台遺跡発掘区



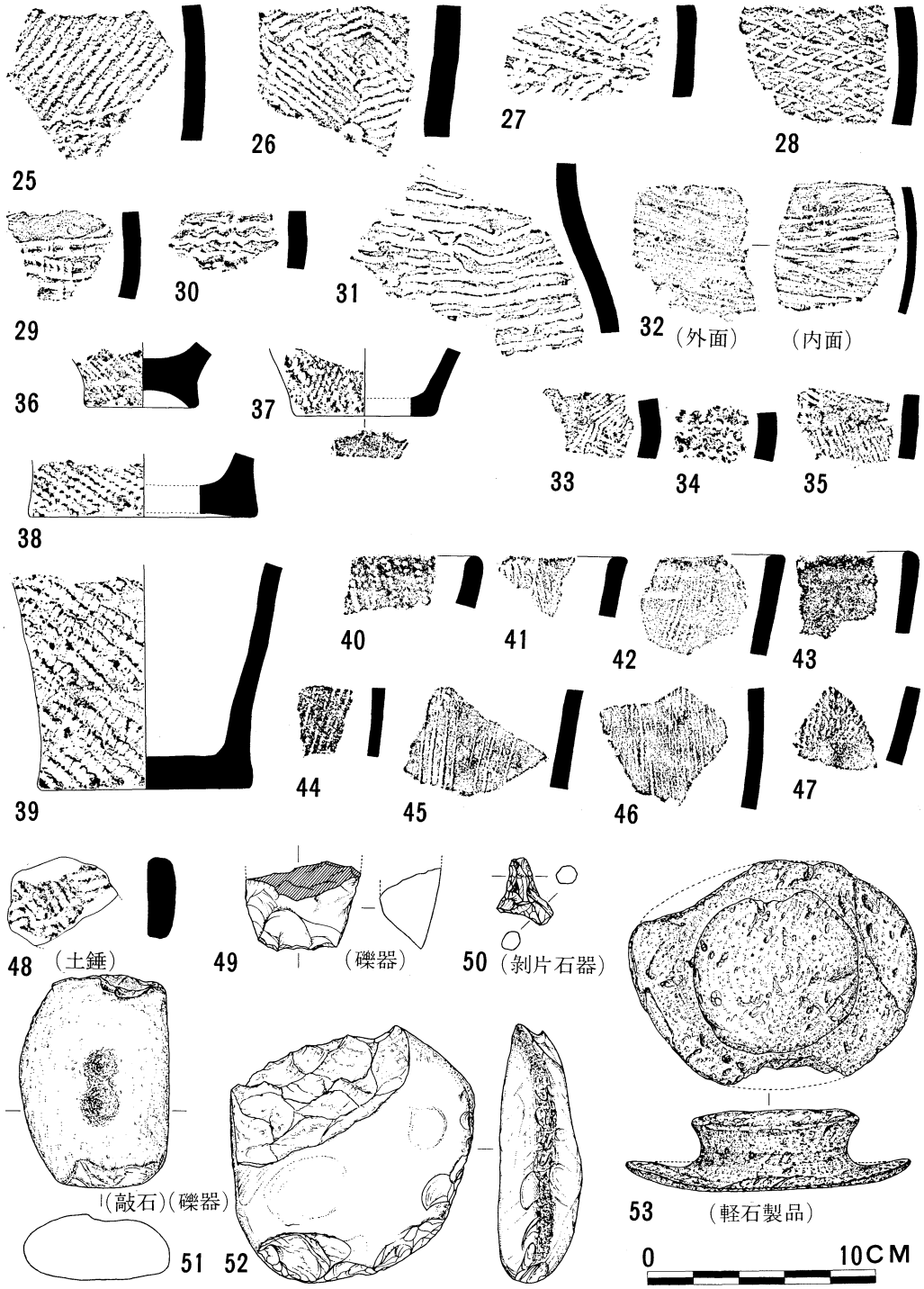
2＝暗褐色土層　a＝黒色土　b＝暗褐色粘質土　c＝混土貝層　5＝関東ローム層

0　3M

第3図　1号住居址実測図

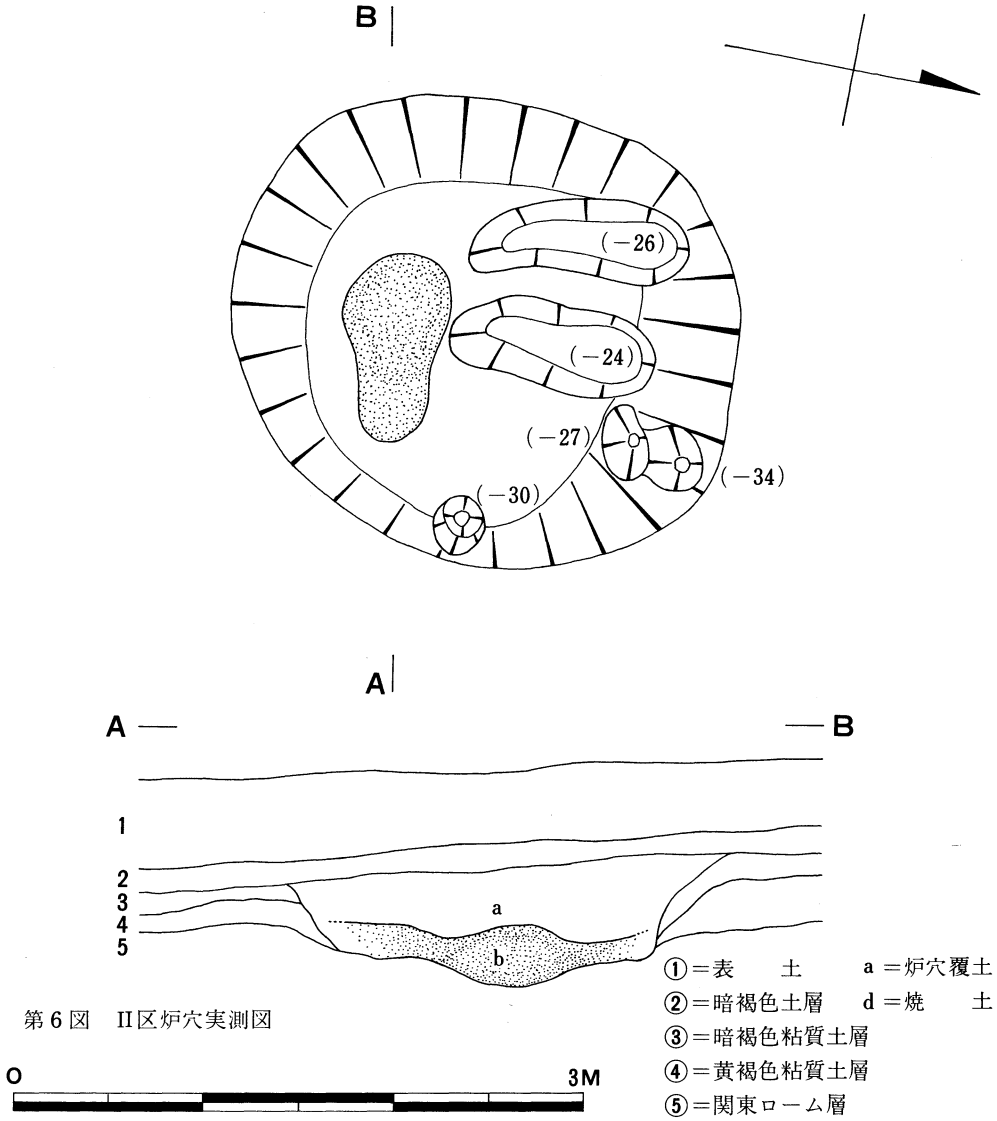


第４図　Ⅰ区出土土器拓本（出土層位）　縮尺1/3
表土＝７・17　暗褐色土層＝２・４・８～12・16・18～21　１号住居址覆土ａ＝６・13・14
１号住居址覆土ｂ＝１・３・５・23　１号住居址覆土内混土貝層（覆土ｃ）＝15・22・24

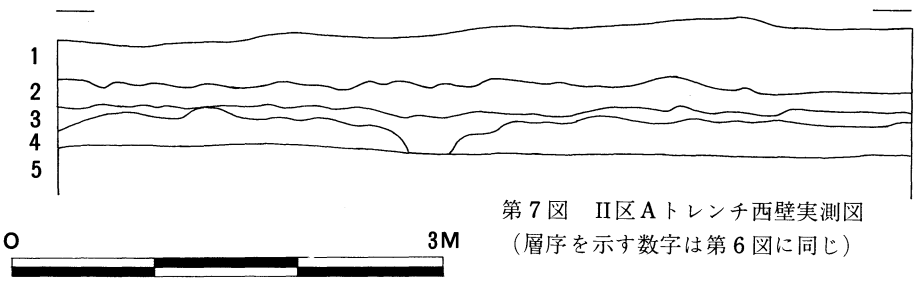


第5図　Ⅰ区出土土器拓本・石器，土製品実測図(出土層位)　縮尺1/3

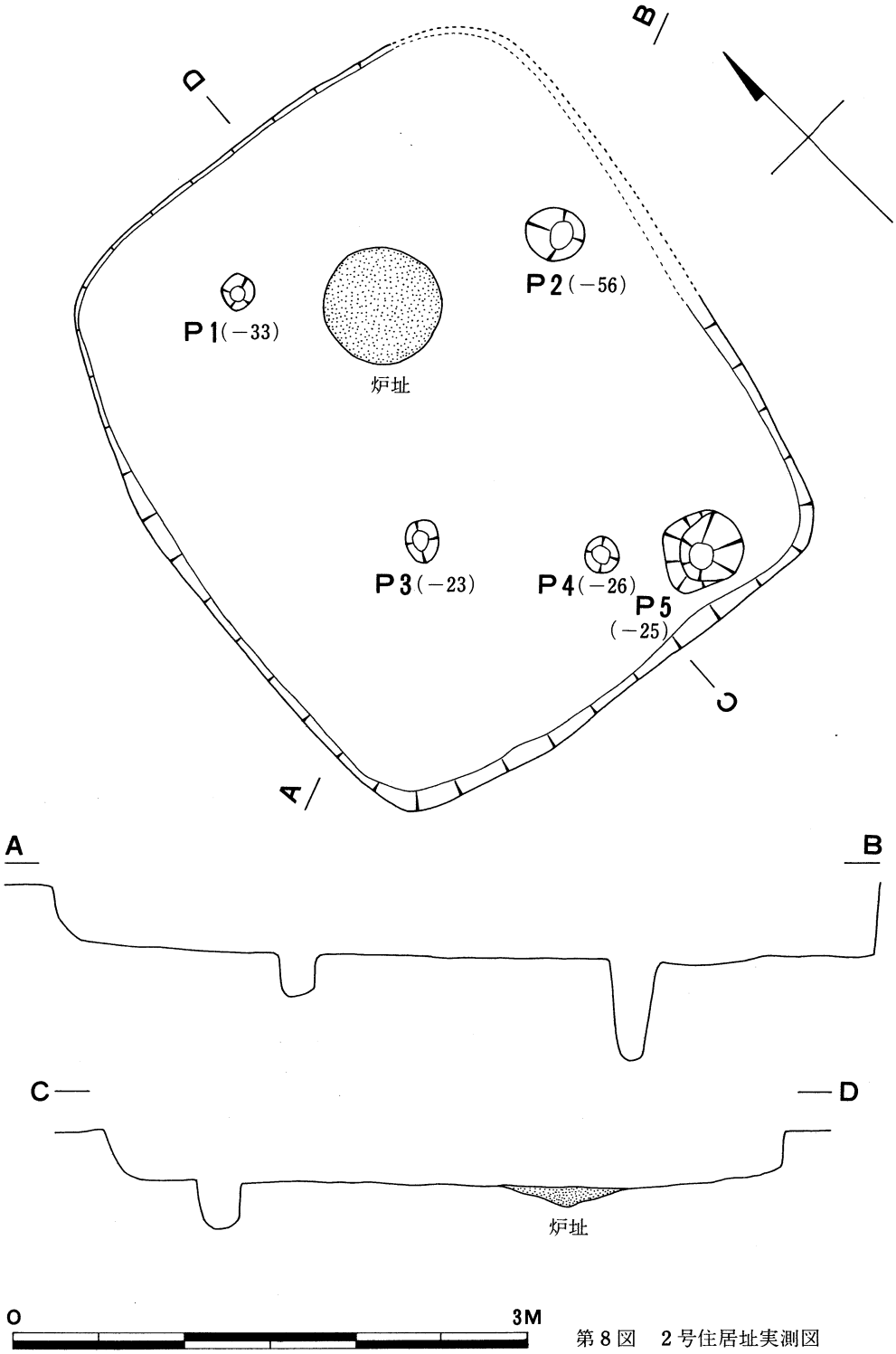
表土＝26・29・32・35・38・43・44・48　暗褐色土層＝28・31・53・51　暗褐色粘質土層＝40～42・45～47　1号住居址覆土a＝30・34・36　1号住居址覆土b＝25・27・33・37・50・52　1号住居址覆土内混土貝層(覆土c)＝39・49



第6図　II区炉穴実測図



第7図　II区Aトレンチ西壁実測図
（層序を示す数字は第6図に同じ）

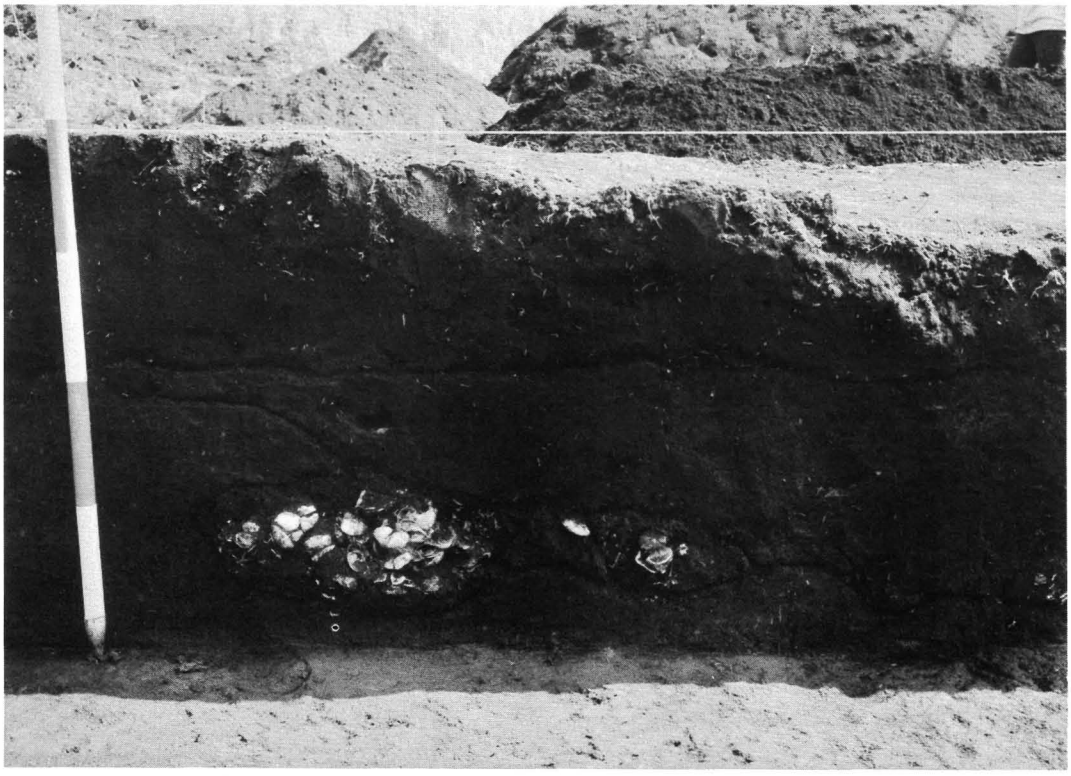


第8図　2号住居址実測図

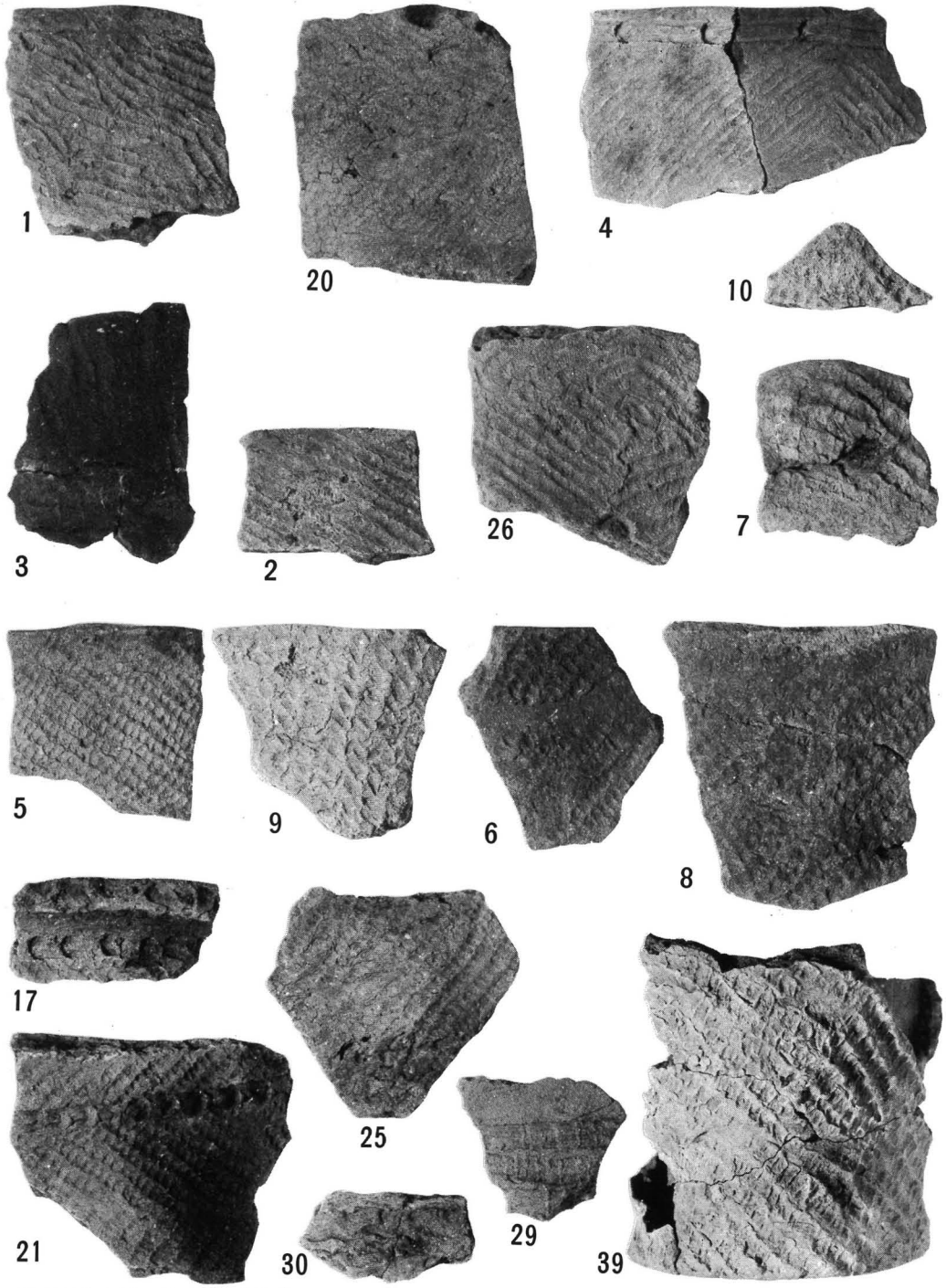
1． 上台遺跡(配水場東地点)遠景

2． 1号住居址

1．　1号住居址内貝塚堆積状態



2．　1号住居址内貝塚貝層断面

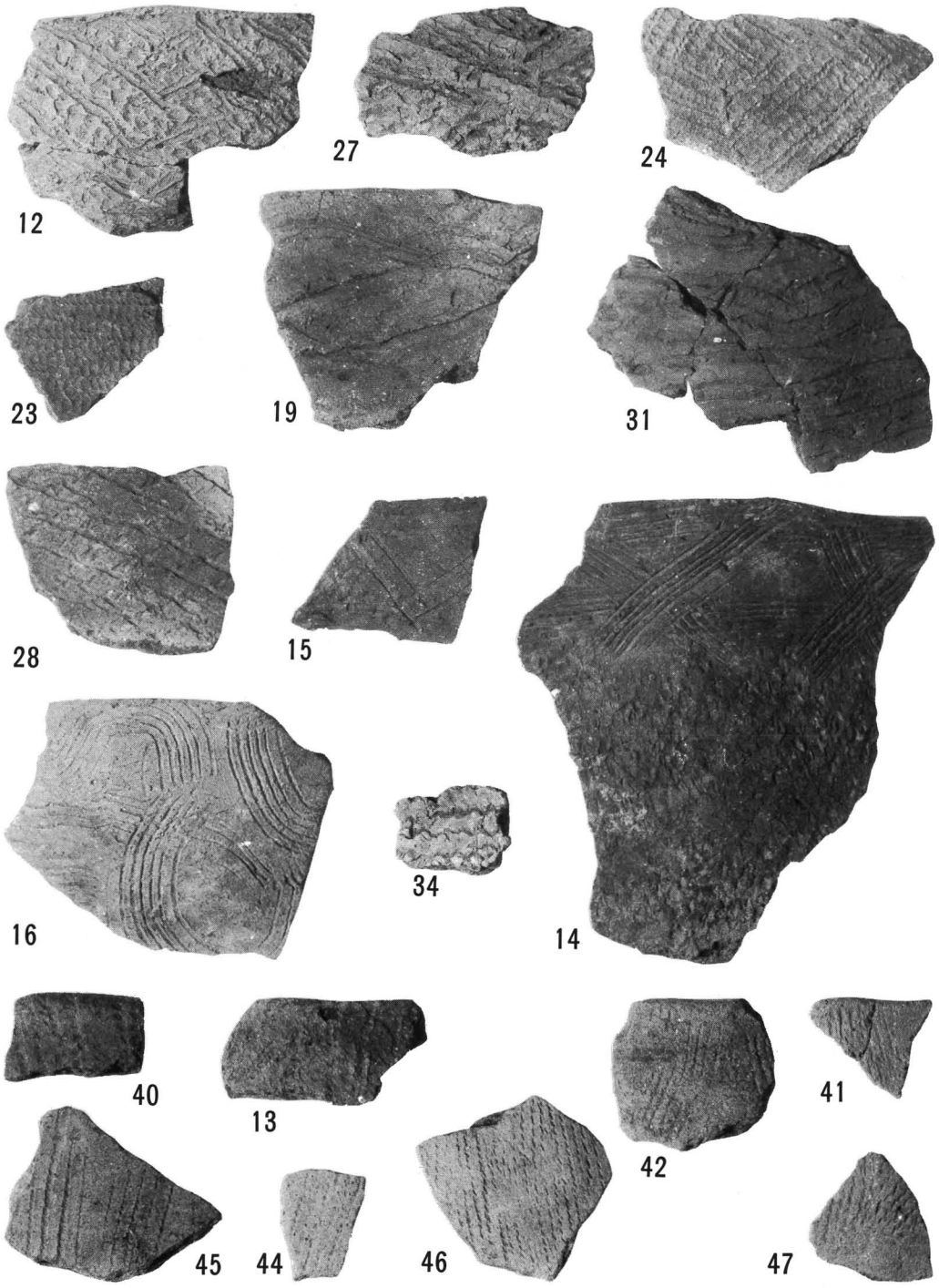


Ⅰ区出土土器－1（出土層位）

表土＝7・17・29　暗褐色土層＝2・4・8～10・21・22　1号住居址覆土a＝6・30

1号住居址覆土b＝1・3・5・25　1号住居址覆土内混土貝層（覆土c）＝39

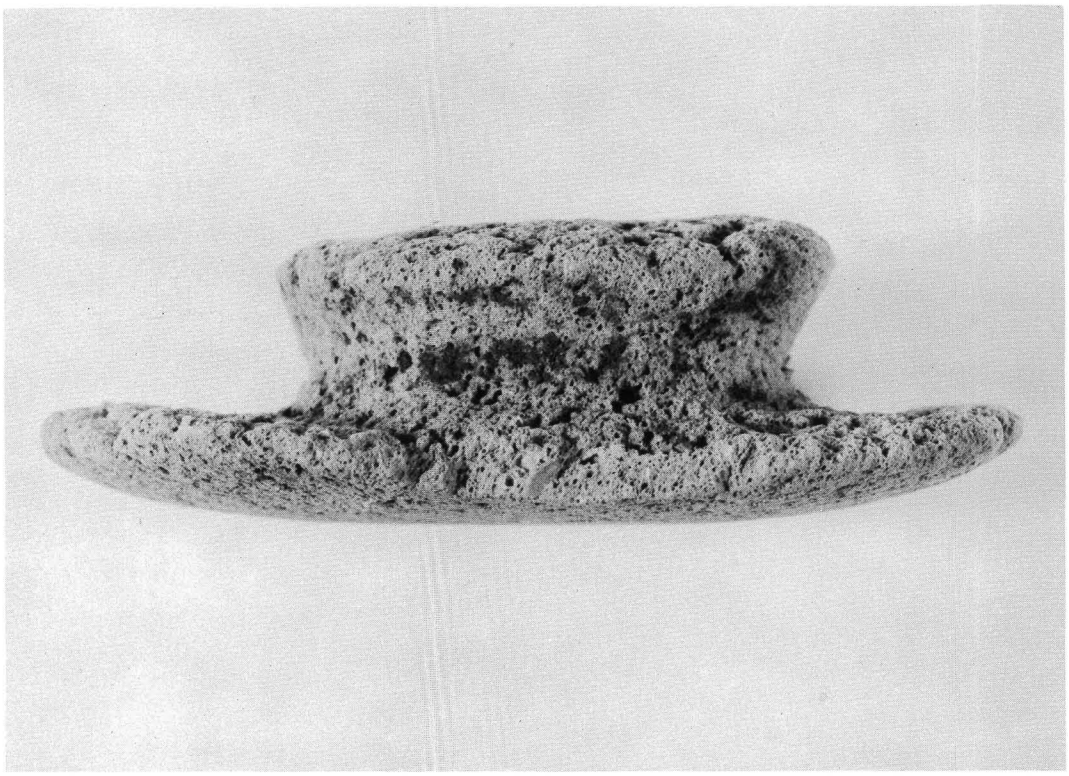
1区出土土器　(1/2)



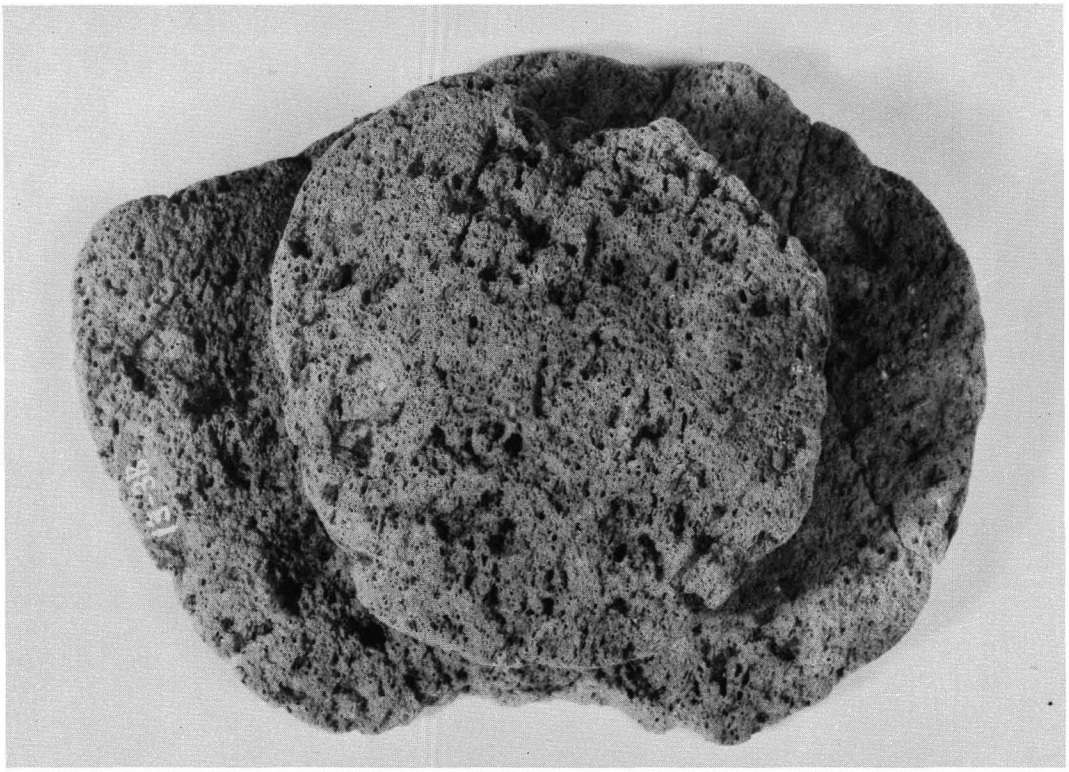
Ⅰ区出土土器－２（出土層位）

表土＝44　暗褐色土層＝12・19・31　暗褐色粘質土層＝40～42・45～47　１号住居址覆土ａ＝13・14・34　１号住居址覆土ｂ＝23・27　１号住居址覆土内混土貝層（覆土ｃ）＝15・24・28

１区出土土器　(1/2)



1． 軽石製品側面（1号住居址覆土出土）



2． 軽石製品平面（同上）

1．　2号住居址（南側より）

2．　2号住居址（東側より）

昭和54年3月25日　印 刷
昭和54年3月31日　発 行

編集者兼発行者
神奈川県立博物館事務取扱
小 坂 昭 三
横浜市中区南仲通5-60

印刷所　東邦印刷株式会社